

Graded Direct Method Teachers' Group

News Bulletin

第 24 号

英語教授法通信

1972年5月20日

編集・発行・英語教授法研究会 事務局・東京都世田谷区豪徳寺2-27-19 吉沢美穂方 TEL. (429) 5929

GDMと一般意味論

片桐ユズル

コージブスキーの「一般意味論」の基礎は「同一」ということはこの世のなかにありえない、というかんがえだといったらよいだろうか。一般意味論では、同一をあらわすbe動詞“Is of identity”にひっかかるな、ということさえずいっている。“Identity”とは“absolute sameness in all respects”と定義される。

たとえば“GDM is good”というようなstatementがあると、われわれが無自覚的にもうことを展開してみれば“All GDM is good to all persons at all times”だろう。一般意味論では“all”ということはいってはいけないことになっている。GDMはだれにでも良いかといえば、たとえば、あまりちいさい子どもにはよくない。ある種の性格の教師と、ある種の性格の生徒にとっては肌があわないかもしれない—そういう教授法と性格の関係のようなことをGDM研究会で研究してほしい、という声があったが、GDMでもってhappyにやっているGDM研究会の人間にそういう研究をのぞむのはむりだ。だれか外のひとがやったらいいだろうが、そのとき現体制のワク外から公平に見ることができるとかどうか疑問である。

GDMはいつも良いというわけにもいかないだろう—入門期においては良いだろうが。すすんだ段階ではどうだろう？ GDM is good on an advanced levelであるとして、そのようなものを“GDM”と呼べるだろうか？どこまでがGDMなのだろうか？するとこんどはGDM₁はGDM₂ではない—AさんのGDMはBさんのGDMではない。A先生のGDMは生徒Cにとって良いが、B先生のGDMは……………

GDMほど教条主義からとおいいものはないとおもっているが、いかなるsystemも機械的になりドグマにおちいる傾向は内在する。Fool-proof cameraとかATSのような絶対に失敗しない方法があれば、それによりかかりたいとおもうのが人情だろう。教授法というものが、それにたがってれば、ぜったいまちがった英語におちいらずに毎日が無事にすごせる—GDMにその境地を見出したい、あるいは見出したとおもうひとがいるかもしれない

いし、現在のGDMはまだまだその境地からほどとおいから教師用書をもっとくわしくし、standardなworkをたくさんつくり、flash cardsを印刷し、テキストも日本の中学校で使えるように、それからaudio-visual aidsを整備し、teaching materialsも、ここではコレとコレというふうにきめて、買ってそろえ、etc., etc. とのぞむ声はつねにある。

しかしfool-proofの写真機は、暗いところではシャッターがおりないことで、みずからの限界をわきまえているし、ATSはあまりにもみずからの限界を厳密に規定しすぎるので、ふつうは運転手はoffにしているとか。機械はそれほど精密なものでもなければ、機械的ということはそれほどくちななことでもない。LLというものは目のまえにいる生徒があきらかにまちがった発音をしているのに、そいつとしゃべるのにスイッチをいれて電気をとおしてしゃべらなくてはならない—よべばきこえるひとに電話でしゃべらなくてはならない、というようなもどかしさがある。ぼくの耳はけって良い方だとはおもわれないが、ある日アカイのM8のテープレコーダーでピート・シーガーの音が本物よりも低くきこえた。これは回転数がくるっているのに違いないと業者をよんでしらべさせたら4/1000の誤差で、5/1000の許容の範囲内で、どうにもなおせません、ということだった。

大阪YMCAでは、まえに毎日、先生がその日にやらせるworkをリコピーで、その日につくっていたが、どうせやるにきまっているし、ひとりひとりばらばらでなくて、おなじものをつくっておいしたら、ということでwork sheetsをみんなであつまって考え印刷することになったが、ひとりのときは気らくにかんがえられた問題が、みんなでも共通に使うとなると、content wordsはなにがおしえてあるか、人によってちがうし、自分の生徒だったら、それまでのナレイイがあるから、問題のやり方はうさく指示しなくてもわかるが、共通問題となると、そういう先生と生徒のcontextの共有にたよることができず、紙の上だけで首尾一貫しなくてはならないので、とてもむづかしいものだ。こういう作業をしてわかるこ

とは、GDMTOSABORI ≠GDMTOYONAKA ということであり同じ土佐堀のなかで、おなじ学年をもっていても稲垣さん、岡部さん、田村さん、みんなちがうということだ。

自動車の免許証の書きかえのときに交通法規の講習会に出なくてはならないが、垂水警察署が1971年の秋にやった会はとでもよかった — というのは、どこそこの曲り角ではこういう事故がおこりやすい、とかいうのはなしたいてい、そこを通ったことがあり、よく知っている場所だったり、問題意識をもってるところだからだ。こういうふうに地域と密着すれば、交通法規が生きる。教育も本来、地域的なものだ。それが標準テストのようなかたちが入ってくると、足が地からはなれ、にせものになる。稲垣さん、岡部さん、田村さん、etc. のGDMがみんなちがうということは、それぞれの先生の生徒とのかかわりのつくりかたがちがうということだ。ちがう personality のひとが、おなじかかわりのつくりかたをしたとしたら、そのほうが、にせものだ。

けっきょく、あまり機械にたよるとか、あまりにもきちんとして組織的になっているものは、つねに変化している現実に対して、対応しきれない。B52のじゅうたん爆撃よりも、手づくりの小まわりのきくゲリラのほうが勝つようなところがあるみたいだ。

するとGDMは、それにたよっていればぜったいに罪をおかさずにすむ免罪符ではなく、良い英語の先生になるための方法のひとつといたらよいだろうか。たぶん、ひとりのひとが良い英語の先生になるためには、GDM以外の方法も、同時に併用することになるだろう — それは Oral Approach とかかって、GDMと同列にならぶようなものではなくて、もっとことなつた dimension における — 教育についてのかんがえとか、linguistics とか、psycho-physical training とか、そういうものだ

ろう。

ところで、GDMが良い教授法であるためには、教師自身が安心してよりかかって mechanical になり得るようなものではなく、教師を mechanical にさせにくいような装置を内臓していなくてはならない。それはなにか？それはGDMにおいては、どうしても live situation による導入をしなくてはならないことにある。ここでは教師はどうしても自分自身をあらわさなくてはならない。そして生徒とかかわりをもたなくてはならない。この状況はいつもちがうのだ。「地図は現地ではない」予定どおりにいかない。創造的とは、生徒の状態について自覚的であることだ、と『語学教育』No. 297-8 (1971) で Douglas Stout はいっている。生徒を知れば、機械的にやることはできなくなる。

そして live situation から sentence をつくるとき、sentence で切りとられたこと以外に、その現実のなかでいかに多くのことが言いのこされているか、生徒は目のまえに見ている。ことばに言いあらわされたものが、この世界のすべてではない、むしろ言いあらわせないことのほうが多く、ことばをいくつかさねても現実をえがきつくすことはできない。— という一般意味論のおしえをGDMでは毎時間、とくにとりたてて説明はしないが、体験的にくりかえさせていることになる。

一般意味論は、意味についての理論というよりは、健康な semantic reaction (s. r) を身につけさせるための教育の方法であり、いろいろな実験や demonstration がかんがえられている。Verbal explanation をあてにせず、direct method でせまろうとしている点、GDM もならい、おしえるところがあるとおもう。なおコージブスキーは抽象とか知覚のレベルということをよくいうが、視聴覚教育のデールの「経験のレベル」というかんがえとかみあわせてみるのもおもしろいだろう。

入荷しました。

Learning English Language	Book I	460円
〃	Book II	650円
〃	Book III	650円
〃	Book IV	460円
Book II と Book III の Work book		650円

お申し込みは当社へ直接お願いします。

その他 Basic English 関係の図書も多数取揃えています。

株式会社 スクール・ブック・サービス

東京都新宿区早稲田鶴巻町442 Tel. (202) 6591

わたしが入谷敏男氏や、藤永保氏の書いたものを読んで、内言語（入谷氏は内言と言ひ藤永氏は内語と言っている）ということばに触れて、すぐに思い出したのは、前にマルティの言語学を読んだとき、その中で使っている「内部言語形」ということばであった。マルティの説はフンボルトの *Innere Sprachform* を発展させたものとされているが、マルティはこれを比喩的内部言語形と構造的内部言語形に分けて、いっそう精緻な考察を加えている。彼によると内部言語形というのは、音声として表出される言語形以前の純粹に心理的な現象についての分析であった。

入谷氏と藤永氏との言う内言語は、ソヴィエトのヴィゴツキーの考えの紹介であるが、ヴィゴツキーは、これについて、*Thought and Language* という著書の中で、次のように定義している。“Inner speech is not the interior aspect of external speech — it is a function in itself. It still remains speech, i. e., thought connected with words. But while in external speech thought is embodied in words, in inner speech words die as they bring forth thought.

Inner speech is to a large extent thinking in pure meanings. It is a dynamic, shifting, unstable thing, fluttering between word and thought, two more or less stable, more or less firmly delineated components of verbal thought. ……// これはむずかしい定義であるが、要するに心の中での、語と思想とのわたり合い、その間のからみ合い、不安定なこともあるが、時にははっきりした言語として意識されることもあるようなもの、ということになりそう。これはマルティが、ことばの形をとる前の心的作用として考えていた内部言語形とは、やはりかなり違うものらしい。

ヴィゴツキーはまた、幼児の言語発達段階で、外部とのかかわりでのみ可能であった発語が、ある時期になると、外界とのかかわりが次第に粗になって、独りごと（音声化されることも、されないこともある）を言うことができるようになる。これが即ち論理的思考を可能にするのだというような意味のことを述べている。

それではこのような内言語がいつ頃から子供の心に形成されるかという点、3才頃からはじまって7才頃までに一応完成されるらしいと、彼はソヴィエトの子供たちの言語発達の観察の結果を報じている。このことは日本の子供についてもあまり違わないのではないかと思う。

ヴィゴツキーの考えを受けついで、同じくソヴィエトのア・エル・ルリヤは、一卵双生児の言語と精神の発達を詳細に観察している。双生児が、お互いに非常に密着した生活をしているときは、彼等の言語の発達は、著しく阻害され、従って精神一般の発達もたいへんにおくれるが、一定期間の後2人を引き離し、それぞれ違った状況で生活させると、他の子供たちとの交流がし易い状態に置かれた双生児の方が自立した言語を獲得するのがはるかに早いことも明らかとなった。ルリヤは内言語という言葉はしてないが、子供の言語が行動密着言語から、計画的言語、叙述的言語と発達するありさまを詳しく述べている。このうち行動密着言語をヴィゴツキーの言う

外言語、すなわち場面と結びついた言語と考えることができるし、計画的言語と叙述的言語を、場面の範囲をこえた言語、すなわち内言語と考えて、だいたい誤りではないであろう。

以上で内言語の大要を述べたことになるが、ここで「GDMを実践している者にとって、内言語とは何か」という問題が起ってくる。ヴィゴツキーや、ルリヤが対象としているのは、子供における母国語の発達段階である。この2人の説は、抽象論ではなく、実験データに基づくものであるから、はじめにも言ったように、子供が母国語を学びとる経過を示すものとして、かなりの一般性を持つものと思っただけであろう。GDMで英語を教える対象となっているのは、ほとんどが7才以後であるから、日本語を内言語として発達せしめた後の日本人ということになる。

ここで少し外言語と内言語との関係を、外国語を学ぶ者のたちばから、考えて見よう。しっかりした外界との結びつきによる外言語の発達がなければ、次に現われる内言語のすなおな成長がないことは、少しでも意味論的な考えに親んだ者にとっては、自明のことであろう。たいへん大ざっぱな言い方を許してもらえば、GDMは既に母国語において、内言語すなわち外界と切り離されたところでの言語独自の世界 — を持つ能力を持っている者に、外言語の経験を組織的に与えることであると言えるであろう。この段階をていねいに、基礎語中の基礎語を用いて体験させているGDMの価値をあらためて考える必要がありそう。母国語のばあいはこの期間に、雑多な言語材料を、自らの力で体験し象徴としての言語の、もっとも言語らしい世界、目前の世界と相対的に独立したもうひとつの世界、すなわち内言語を獲得し、これを維持することができるようになるわけだ。

さてここで考えてみなければならないことは、外国語のばあ内言語をどこまで成長させることができるかと言うこと、外言語的学習から内言語的学習に、どのようにして移って行けばよいかという問題であろう。ここでは第1の問題を考えているひまがないので、実際的な第2の問題に少し触れたいのだが、これも余白が少ないので、ただわたしの考えを仮説として提起するにとどめよう。

EPの1がすんだら、どのようにして次の段階に進んだらよいかについて、まよっている人が多いようだけれど、EP1が終ったなら、次の段階（すなわち、英語でひとりごとが言え、英語で考え、英語が書けるようになる内言語の段階）に移るとき、漸進的になめらかに進めようと苦慮しないで、EP1で得た能力を十全に利用する態度さえたいせつにしていればそれでよく、ひとつの飛躍として、読み書きの段階に進むべきではないであろうか。直接に場面と結びつけようとしなくても、EP1で得た知識と能力を媒体として、自信を持って進めばよいと思う。このようなことをGDMを実践もしていないわたしがこれ以上言うのは、たいへんおこがましいので、実践家である皆さんのお考えを是非おききしたいと考えている。

G. D. M. の G について

升川 潔

昨年の室先生のお話を要約してみるとそれは「context を大切に」ということと Verbalism ではないということだったと思う。例えば happy でなくても、I am happy といえるし、happy であるかどうかは、その時の context によるものだ。意味という「現象」は context なしには起らないのであって、これを我々の考えに近づけると、SEN-SIT が必要ということになる。もう一つは、コトバ=コトバという置き換えでは意味がないということで、現実をコトバで切り取っていくことが必要だということです。例えば nightingale = 夜鳴きうぐいす、でわかったような気になっているが、実際はその鳥を見たことのない人には本当にわかったことにはならない。Richards の意味論からいえば、上のことは Symbol = Referent つまりコトバ=現実のように考えてしまっていることになる。Richards の意味論はこれらが同じではないということから出発している。これを一般意味論の立場からいうと、「地図は現地ではない」ということになる。鎌倉の地図を見ると、鎌倉という現地がわかったつもりになっているが、本当は現地に来て見て、始めてこの落ちついた雰囲気だとか、culture のにおいのすることがわかる。地図は現地のいろいろな要素をすてているわけである。

さて今日の本論である grading について三つのことを考えてみよう。1. 意味のひろがり、2. metaphor、3. 意味のひろがりの質です。

まず意味のひろがりについていえば、この現象は英語史でも指適されていて例えば bird を歴史的に見ると、かつては小鳥だけを意味していたが、いつのまにか鳥全般を表わすようになった。dog は最も面白い例で、最初は英国産の犬だけを dog と呼んでいて、そのほかはドイツ語の Hund で表わしていた。それがいつのまにか、English dog が犬全般を表わすようになり、Hund の英語形の hound が獵犬だけを表わすようになった。このように dog の意味が特殊な犬から犬一般に広がる現象を expansion of meaning という。これが我々の grading の基本的な考えの中にある。G. D. M. に例をとると、「トランプの may」と我々はよくいいますが、「これは～かも知れない may」で「～してもよい may」とどちらをさきに教えるかということの意味のひろがりとの関係がある。鎌倉グループがつくった operations の意味のひろがりもこれで、make は最初「作る」ことから教え、次に make ~ white, make ~ warm, make ~ go to the door. と意味をひろげていく。make = 作る、としてしまうと、make ~ go ~ にあてはまらなくなる。我々が基本的に理解しなければならないことは、make の中心的意味は、

change ということ、このように中心的な意味から出発して、意味を広げていき、生徒のコトバに対する柔軟性をつけることが大切だ。この中心的意味を Richards は sense といい、G. D. M. はこの sense という考え方のまわりに、コトバが組立てられている。意味の関連は一つの語ばかりでなく、例えば get と give の対立にも見られる。A give ~ to B は B get ~ from A であり、get したあとの状態は have になる。put - take, go - come, be - seem も対立している。make - let の対立を考えると、make は force を加えて何かをさせる。let の sense は勝手にやらせて置くということだ。又 let は keep と対立する。押えて動けないようにしていれば keep で、放して行かせれば let になる。have の導入は現実に手に持っているものから始め、table に置けば、I have it on the table, であり、家の中にあれば I have it in my house となり、もっと抽象的にいえば I had a dog となる。だんだん抽象化していけば I have an idea になるが、これが G. D. M. の grading を構成している要素の一つだ。

次に metaphor についていうと、「彼は猫だ」といえば metaphor になる。我々は常に、metaphor 能力を発揮して話している。G. D. M. では grading に関して、必ず metaphor でないものから metaphor にひろげていくように仕組まれている。例えば crane というコトバはいろいろな性質を持っているが、その中の「形」だけをとり出すと、起重機になる。鶴と起重機は形が似ているからだ。一般的にいうと、ある語が全体として意味の可能性を持っている中で、一部を特に強調すれば metaphor になる。E. P. の中から考えてみると、人間の eye から eye の位置と形だけをとり出して、the eye of the needle を教える。the mouth of the river, the arm of the seat, the neck of the bottle, the back of the seat, the leg of the seat, etc. metaphor を自由に使えるようにしておくことは、我々の頭の中を絵にしておくことで、文字や spelling が頭の中にあると、しゃべりにくくなる。西山 千氏によると、同時通訳をしているときには、頭の中に入って来るコトバがみんな絵になり、その絵をもう一つの言語で describe あるいは explain することだそう。子供は metaphor 能力が非常に発達している。G. D. M. はこの metaphor 能力をフルに発揮して、具体的なものから教え、だんだん抽象的なものを、具体的な動作に変えて、もしくは具体的にとらえることによって、頭の中に絵を画かせようとしている。これこそコトバの本質であって、全体を絵としてとらえその一部をどこまでひろげようかと考えることができ

ば grading を修得したということになる。ある意味範囲のどこをのぼすかを考えるから、少ないコトバでも、ひろく引き延ばすことができる。at work の at は位置を表わすのが sense で work という位置にいるわけで at work = 仕事中とおぼえないほうがよいし、going to make は make というところに、いくのだということ、going to rain は rain というところに、全体の状態がはいっていくことだろうと思う。sense をつかみ、それからひろげていく能力を身につけたときに G. D. M. の grading が理解されたことになるのではないだろうか。

最後に意味のひろがりの質についていえば、Richards のコトバを借りると、一般的で具体的なコトバから、特殊で抽象的なコトバへ、ひろげていくということだ。例えば thing と addition を較べると、thing は何でも指せるという意味では一般的です。そして指せるという意味においては具体的です。しかし addition は指せない。その意味では抽象的で、しかも特殊なものです。G. D. M. では一般的なものを最初に教える。here はどこでも指せるし、具体的です。そこから、on the table になり、抽象的に at work のところまでいく。これは usefulness と関係がある。我々はよく frequency でコトバを使っているのではなく、そのコトバが有用であるから使っているというが、それは一般的であるから useful な

ので、例をあげると、seat は sofa, bench, chair などの代表として15位の「すわるもの」を指すことができる。seat が一般的で具体的だからである。

以上の3点を how ということから考えると、例えば、here, there が最初に出て来て、on the table というような具体的なものがあとに出て来るのは、宇宙のもろもろのものが here, there で全部切りとれるからだと思う。この全部の中から on the table, in the glass のようにや、特殊化して切りとる。しかし宇宙の現象を切りとれるということでは、全体が常に頭の中にある。ところが一般の教材に対する考え方は積み重ね方式であり、違いは最初から全体を頭の中に入れて、こまかくしていく方法とカワラを積み重ねていくような方法で、私は前者の方がよいと思う。これを方法論と結びつけると、SEN - SIT つまり sentence と situation を結びつけるということ、contrast をつけるということ。これは Sense を direct にとらえるには重要なテクニックだと思う。最後にまとめていうと、頭の中に絵を作らせること、その絵がふくらんでだんだん複雑化していくということ、これが我々がねらっているコトバの本質でないだろうか。

(去る4月15日 東京・鎌倉合同月例会での講演を箕田が要約したものである。)

各支部の活動

1. 東京支部

公開授業研究会は6月3日(土)新宿厚生年金会館で行われる。

Basic English 研究会では現在、プリントした問題(operations)、蜘蛛の糸の Basic 訳、ウルマンの「言語と意味」の輪読をやっている。

2. 鎌倉グループ

昨年の operations の一その文型および意味の展開にひきつづいて現在、Things and Qualities の意味の展開に取り組んでいる。今年の東京支部との合同例会は4月15日(土)婦人子供会館で開かれ升川さんの Lecture と岡部さんの Demonstration を行なった。

3. 関西支部

関西支部の事務局が大阪 Y M C A より、松蔭女子学院大学英米文学研究室へ移った。

新住所は、神戸市垂水区多聞町火の蔵 409、松蔭女子学院大学英米文学研究室気付。

読書会では現在、underachieving school (John Holt) を読んでいる。関西支部の教育路線は当分続きそうだ。

2月9日(水)～2月23日(土)に行われたセミナーは、大阪北 Y M C A 小学生科の teacher's training のためのプログラムで、片桐ユズルさんは ETP. P58 以後のプラクティスを持たれ、中尾ハジメさんは、子供達の心理上の問題について受け持った。みんなで話し合っている間に、すべては教師自身の問題に帰着するのだということになった。それぞれの先生にとっては革命的とさえいえるような非常にいいセミナーだった。

4. 金沢支部

2月13日～14日、金沢 Y M C A で、G. D. M セミナーが行なわれ、升川さんの Demonstration. そのあと、discussion とつづいた。次の研究会は5月27日(土) 2時～5時(P. M.)。やること 1. 「G D M と言語活動」升川潔さん 2. Demonstration (2つ) 3. discussion です。

5. 北九州、福岡、熊本 Y M C A 合同セミナー

吉沢さんが出席して、3月23日(木)～25日(土)行われた。

6. 呉セミナー

3月25日(土)～26日(日) 片桐さんが出席して行われた。

Advanced Seminar '72 報告

毎年みのり多いセミナーの一つとして、春休みを利用した Advanced Seminar '72 は、今年も

野口英世記念館で

3月27日(月) ~ 3月29日(木) の3日間

朝9時から午後5時まで、25名が参加して行われた。いわば、経験者の集まりなので、それぞれの demonstrations も見事で、又その批評も鋭いものが多かった。今年度の Seminar の特徴は、

- 1) 日頃 GDM を実践している人が
- 2) EP-1 の難かしいと思う個所に自ら挑戦して、
- 3) 日頃の問題意識をぶつけあう

というところにあった。従ってお互いが先生になり、生徒になりあうことによって会は進行していった。そこには、オーソリティもなく、新人もない。自らを研修し合う中にも We are a family という清涼感に似た満足となごやかさがあつた。

Seminar は終始 demonstration と discussions のくり返しという形をとったので、かなり強行軍だったが、いたいことは参加者全員がいい合った。

第1日(27日)

- * go と come (唐木田さん)
- * one, another, the other (橘川さん)
- * when (interrogative, conjunction) (小川さん)
- * when (conjunction) (田村尚子さん)
- * no (吉田さん)
- * some (all, no と対照して) (岡田さん)
- * keep (吉川さん)
- * make (村山さん)

第2日(28日) 総武線の事故のあった日。遅刻多し。

- * P. 160 のあたり(特に大きな point の少ないページをどう扱うかに重点があつた) (小林久子さん)
- * which (interrogative と relative) (田村美智子さん)
- * same, different, sort (齊藤さん)
- * " " " (稲垣さん)
- * who, which (interrogative と relative) (夔川さん)
- * keep と let (鈴木さん)
- * Let me (稲田さん)
- * seem (箕田さん)
- * which (relative) (根古谷さん)
- * how much? how long? (服部さん)

第3日(29日)

- * if (山田さん)
- * may (抱井さん)

午後、東京月例会と合同。

- * passive (吉沢さん)
- * present tense (東山さん)
- * EP-2 (P. 79) の応用 (升川さん)

各 demonstrations の技術を細かく再現出来ないのが残念だが、ある人は、review から導入 → practice が実に多彩でスムーズであり、又ある人は、demonstration の中に問題提起をしたりした。ここで comments を若干拾って見ると、

- ① SEN-SIT を明確にするには、はっきりとした、contrast をつけることが大切である。そのためには、その語の中心的意味を正確につかんでおく必要がある。
- ② function words や文型を present する時には content words はふやさないこと。
- ③ 経験をへて来ると、SEN-SIT を作るのに、こりすぎる傾向がある。ごく普通のものを使って地味にやるのがよい。
- ④ 生徒の発言を多くするには、教師が生徒の発言を出来るだけひき出すようにしむけるのがいい。などなど。Practice makes perfect. でこれからも Seminar は、出来るだけ実際に教えて見ることを主にしていくが「ツカレタケレド、タメニナル」というのが終ったあとの参加者の実感であつたようだ。(升川記)

セミナーこぼれ話

- * 春の Seminar は、GDMjargon が出来るので有名だが又一つ、「それ目」というの聞いた。「雑誌などから写真を切りとって授業用にとっておく場合、それ目になって探す結構いいのが見つかるものよ」という吉沢さんの言葉がそれ。(カゲの声「そのつもりになって」ということですぞ。念の為)
- * 小高一夫さんのあとをついで頑張っている千葉大附属中の根古谷常雄さん、総武線の電車事故にもかかわらず、大急ぎでかけつけて、ball を二つもち次々といわせる。同じ文をいうと Your English! とくる。生徒になりきって creative な授業を受けさせてくれた。
- * NHK 学園高の夔川嘉孝さん、which の demonstration で奥さんの作った juice をとりだし This is the juice which my wife made. とやったので一同口をあめぐり。
- * 箕田兵衛さんは、春の Seminar で女装をし、口紅まで塗って seem to be pretty といわせたかったが、どう見ても彼は男性としか見えず、一同 No, you don't seem / 中には涙を流してタノシシダ人もいた(?)。

- *小高一夫さんは、千葉大附属中から松蔭女子学院大学講師となって関西へ行った。いわばトレード(?)だがどこにいても彼は精力的に働らくだろう。小高さんのあとは、根古谷常雄さんが、がんばっている。
- *その逆に岡本寿美さんが結婚して横浜に来る。各方面から仕事でねらわれている。ドーゾヨロシク。
- *このところ、あちこちのYMCAでGDM seminarsが開かれている。吉沢美穂さんは、3月末、北九州・熊本・福岡合同セミナーへ行った。「みんな、GDM型になっているので感心しちゃったわ」と東京のセミナーでハッパをかけられた。片桐ユズルさんは12月に呉Y(広島)へ行った。相変わらず彼の読書欲は旺盛で progressive education やら柳田国男やら一般意味論やらでオйкаケルのが大変ですねえ。「にっこり笑って人をキル(?)」という升川潔さんも、1月に金沢Y、4月始めに名古屋Yに行き、女性に囲まれ(?)ハリキッタらしい。市村邦一さんは東京YWCAで4月からGDMを始めた。
- *教科書にケチばかりつけていないで、コチラ側に立った自主教科書を作って見ようじゃないかとハリキッているのは、市村邦一さんを中心とする箕田、橘川、山田、田村尚子、薮川さんらの一条校のめんめん。昨年からはあちこちでプロジェクトチーム方式が着々結実し

ている。タノンマッセ。

- *鈴木弘之さんは、羽水高校から福井工業高校に転任。昨年はアメリカ、カナダ、ヨーロッパを研修旅行したとのこと。今後の活躍が望まれます。
- *高原備さんは、松蔭女子学院大学より同志社大学工学部へ。
- *高原菊江さんは、大阪中央YMCA、小学生科アシスタントに。
- *田村美智子さんは、大阪中央YMCAより、堺YMCAへ。
- *片桐ヨウコさん、午前8時から始まる語学研修センターのクラスのために、毎朝5時半に起きている。このためぐっとスマートになったらしい。
- *丹羽美津子さん、最近入会したばかり。金沢YMCAで頑張っている。春休みには上京してGDMの資料を集めたり、吉沢美穂さん宅を訪問した。
- *中郷安浩さん、あちこちの speech clinic でひっぱりだこ。最近神戸YWCAの児童英語研究会の講師をなさった。彼のGDM熱は年ごとに深まりつつあります。
- *山田初裕さん、目黒九中でもGDMを始めた。前から手がけている老人問題もいよいよ活動開始とのこと。
- *天野武男さん、8月よりアメリカに行く。一人者の楽しさを大いに味って来るらしい。来年6月に帰って来るとのこと。

好評重版なる!

絵を使った文型練習

国際キリスト教大学講師 吉沢美穂著

英語入門期に視聽覚的な教授法が役立つことは論をまたないが、その効果的な用法は十分に研究されているとは言えない。本書の著者はハーバード大学のI・A・リチャーズ博士のもとで言語伝達の理論に基づいた英語教授法を学び、爾来十余年にわたる研究と実践を一冊にまとめた。ここに扱われた文法事項、語法、基本語は三百に及び、教科書の種類、学年に関係なく、ページを開けば絵を使った文型練習が得られる。練習の効果を高めるために初・中・上級別のワークブックを添えた。

中学校、高校、講習会、家庭での学習に最適

A5判函入(テキスト一冊
ワークブック三冊添付)

定価六五〇円

東京都千代田区神田錦町3-26 大修館書店 Tel(291)3961-5

Graded Direct Method

Summer Seminar のお知らせ

とき : 1972年8月17日(木)~21日(月)

ところ : 東山荘 (静岡県御殿場市東山)

講師 : 吉沢美穂 (ICU講師・英語教授法研究会代表)

東山 永 (GDM鎌倉グループ代表)

片桐ユズル (松蔭女子大学教授)

升川 潔 (東京女子大学短大部助教授)

中郷安浩 (大阪市立大助教授
スピーチ・クリニック担当)

伊達民和 (スピーチ・クリニック担当)

小高一夫 (松蔭女子大学講師)

内容 : Graded Direct Methodの理論と実際を、小学
5・6年生クラスで実習したり討論しながら習
得する。ほかにスピーチ・クリニック、レクリ
エーション、特別プログラム etc。

資格 : 英語教育に熱意のある人ならどなたでも。

費用 : 受講料 8,000円 (含1972-73年会費)

+申込金 1,000円

宿泊料 9,000円 (4泊食事付)

計 18,000円, ほかにテキスト代

申込方法 : 申込金 1,000円を同封して7月31日までに大

阪市西区土佐堀2丁目12 大阪YMCA英語学
校 GDM Seminar 係まで申しこんでください。

Tel. (06) 441-0892

ただし定員50人に達ししだいしめきります。

同時に Advanced Group を平行して作ります。

詳細は会報をごらん下さい。

共催 : 英語教授法研究会

大阪YMCA 英語教育研究所

★ 入 会 案 内

1. 御入会は、氏名、現住所、勤務先(電話)等を書き、年会費(毎年9月~
翌年8月迄) 1,000円をそえ、当研究会事務局 (東京都世田谷区豪徳寺
2-27-19 吉沢美穂方 Tel. (429-5929) まで御申込下さい。
2. 英語教育に熱意ある方ならどなたでも。
3. 月例会、公開講演会、各種セミナー等、諸活動の案内、出版物の案内、
英語教授法通信等をお送りします。